国際医療福祉大学審査学位論文（博士）
2022 年度大学院保健医療学研究科博士課程論文要旨

題目：血液透析業務における看護師の困難感評価尺度の開発

保健医療学専攻・看護学分野・看護管理・政策学領域
氏名：梁原裕恵

キーワード：尺度開発　業務困難感　血液透析室　看護師

Ⅰ．研究の背景と目的

血液透析療法は，腎臓が機能しなくなったとき，血液を体外循環によって浄化して体に戻す治療である．血液透析は２～３日間隔で通院し１回３～４時間程度，血液透析回路に拘束される状態であるため，患者にとって身体的，精神的，日常生活的な負担となっている．血液透析は医療事故が発生しやすい要因を常に内在しており，看護師は，体重管理や血糖管理等のセルフケアが改善されない患者との関わりに困難を感じ，一般病棟の看護師よりも精神的な疲弊をきたしやすいことが指摘されている．さらに，オープンフロアという環境の特殊性により看護師は患者の心の支えになってやれていないという役割葛藤がストレスにつながっていると指摘している．

そこで，どのような業務内容でどの程度困難を感じているのかを客観的指標を用いて明らかにすることで，その支援の内容や方策の一助になると考える．しかしながら，血液透析室看護師の業務上の困難感に関する尺度はまだ開発されていない．本研究は，血液透析室看護師の業務上の困難感を評価するための尺度を開発することである．

調査１. 血液透析室看護師の困難感の特徴を明らかにする．
調査２. 血液透析室看護師の業務上の困難感評価尺度の開発および信頼性・妥当性を検証する．

Ⅱ．用語の操作的定義

「業務困難感」とは，体外循環の対症療法を日常的に看護するうえで，患者とのコミュニケーションや，患者の生活に踏み込んだ問題を解決しがたいと感じる看護師の心情とした．

Ⅲ．調査１

調査目的：血液透析室看護師の困難感の特徴を明らかにする．
デザイン：自記式質問紙調査による内容分析　　**調査期間**：2019 年 10 月 1 日から 10 月 31 日.**調査対象**： 関東 A 県の血液透析施設 25 か所で勤務する看護師 120 人.
調査内容：1）対象者の基本属性　2）自由記述式質問内容
倫理上の配慮：本学倫理審査施設委員会の承認を得て実施した（承認番号 19-lg-41）.
分析方法：自由記述式のデータを１文脈１単位とし，血液透析室で勤務する看護師の困難な状況の中から，困難な事象に焦点を当て分類し帰納的アプローチにより抽象化した．
結果：血液透析業務における看護師の困難感は 129 文脈，6 カテゴリを抽出した．
考察：血液透析室看護師の困難感は，【患者対応】【医療事故】【穿刺の重圧】【業務負担】【役割の葛藤】【透析の特殊な状況への思い】であった．これら６つの困難感の内容は，看護師のストレスやバーンアウトに関連する要因であると推察され，筆者の臨床経験からも業務上の困難感の仮説の下位尺度の概念として，概ね妥当であると考えられた．

Ⅳ．調査２

調査目的：血液透析室看護師の業務上の困難感評価尺度の開発および信頼性・妥当性を検証する．
デザイン：無記名自記式質問紙調査
調査対象：全国の血液透析施設のリスト 406 施設から系統抽出法で 75 施設を抽出し，同意が得られた 31 施設に勤務する看護師 469 人.
調査内容：1 回目の調査と 2 回目の調査ともに，①対象の属性，②血液透析室看護師の業務困難感評価尺度の原案，③臨床看護職者の仕事ストレッサー測定尺度（NJSS），④バーンアウト（MBI-GS）．**調査期間**：2021 年 2 月 1 日から 2021 年 3 月 31 日.
倫理上の配慮：本学倫理審査施設委員会の承認を得て実施した（承認番号 20-lg-110-3）.
分析方法：調査 1 の結果から尺度原案を作成し，回収したデータは記述統計，妥当性の検証は，①標本妥当性 KMO（Kaiser-Myer-Olkin），②構成概念妥当性は確証的因子分析と探索的因子分析，③基準関連妥当性は NJSS との相関係数，④弁別的妥当性は MBI-GS 日本版との相関係数を算出した．信頼性の検証は，①内的整合性は，尺度全体および下位尺度のクロンバック α 信頼係数，②時間的安定性は，テスト-再テストで級内相関係数を算出した.
結果：表面妥当性は，血液透析室で勤務経験のある看護学研究者と，現役看護師から概ね妥当であるとの評価を得た．KMO は 0.928，構成概念妥当性は，探索的因子分析で 3 因子 15 項目を抽出し，確証的因子分析でモデル適合度 GFI＝0.904，AGFI＝0.868，RMSEA＝0.073 を確認した．クロンバック α 信頼性係数は尺度全体で α=0.87，第 1 因子 7 項目 α=0.83，第 2 因子 5 項目 α=0.77，第 3 因子 3 項目 α=0.78，テスト再テストの相関係数は 0.78（p<0.01），外的基準尺度 NJSS との相関係数は 0.52（p＜0.01）であった．弁別妥当性 MBI-GS との相関係数は，疲弊感 0.39（p<0.01），シニシズム 0.34（p<0.01），職務効力感－0.21（p<0.01）の相関であった.
考察：第 1 因子の「持続する緊張」は，先行研究のストレスの内容に関連した困難感に類似していた．透析室という特殊な環境で，体外循環を治療の特徴とし，血液透析医療という毎日の単調な業務の中にも，患者の急変の対応や透析機械の操作といった過度の緊張のなかで，医師や患者から透析中の対処が確実にできることを求められることは困難感を助長させると考える．第 2 因子の「患者対応に関する困難」は，先行研究の理不尽に振る舞う患者，会話が成立しない患者，認知機能が低下している患者への対応に類似していた．患者自身の治療上の経験や体験は，患者自身の中で独自の信念や価値観を形成しているとの報告もある．これらのことから，退院後も生涯にわたり透析通院する患者との信頼関係の構築を起因とした概念となったと考える．第 3 因子の「日常生活指導にともなう役割の葛藤」は，先行研究の長期透析患者に対する指導の行きづまり感や，スタッフ間の相互依存，患者の心の支えになってやれないことに類似していた．退院後も生涯にわたり継続したかかわりをすることは，看護師が患者を生活者としての理解を深め，生涯にわたり継続して関わることのできる患者であると認識を変えることが重要であると考える.

Ⅴ．本研究の限界

本研究は，COVID-19 の蔓延化で調査したものである．そのため,質問紙調査への回答そのものが負担となり，白紙での回答など有効回答が少なくなった可能性を否定できない.

Ⅵ．結語

血液透析室看護師の業務困難感評価尺度は，下位概念 3 つの 15 項目となり，信頼性・妥当性は概ね検証された.